御薬園・会津松平氏庭園
朝鮮人参

会津若松市花春町8-1
TEL　0242-27-2472

薬草園・朝鮮人参

会津松平氏庭園

御薬園・会津松平氏庭園は、葦名盛久が永享四年（一四三二）に霊泉の湧き出したこの場所に別荘を建てたのが始まりとされています。江戸時代の寛文十年（一六七〇）には二代藩主保科正経（まさつね）が薬草園を作り整備したことから御薬園と呼ばれるようになりました。庭園は、元禄九年（一六九六）三代松平正容が、目黒浄定を招き小堀遠州流にした「心字」に配した大名型の山水庭園にしました。なお、庭園の東側には、平安時代の石造多層塔があることから、この付近に平安時代の何らかの建物があったと考えられます。

戊辰戦争時には、新政府軍の病院にされていたことから、その時、池の島にある楽寿亭や御茶屋御殿内には、戊辰戦争時の刀傷があります。慶応四年（一八六八）鳥羽伏見の戦い後松平容保は、一時ここに蟄居し、明治時代十六年から数年間、容保一家が住んでいたこともあります。昭和七年十月十九日、国名勝指定。昭和五十四年六月二十五日追加指定。面積約一万七千平方メートル。薬草約四百種がいまでも栽培されています。

会津藩では、「朝鮮人参」を三代松平正容（まさかた）の時、松平氏庭園の御薬園に種苗が持ち込まれていますが、栽培には成功しませんでした。明和三年（一七六六）五代松平容頌（かたのぶ）が今市から種子を持ち込み、成功しました。そのため会津では「御種人参」として呼ぶようになりました。なお、会津の野には「和人参」も自生しています。秩父宮勢津子が宿泊した東山温泉の新瀧旅館別館を昭和四十八年に移した「重陽閣」もあります。

庭園の南東には、与謝野晶子の石碑があります。現在では、北側から入りますが、江戸時代は西に長屋門があり入口がありました。

朝鮮人参

ウコギ科の植物で、高麗人参として知られ、中国や朝鮮半島に自生していました。江戸時代中期、万病に効くとして、国内にはない朝鮮人参が人気となり、高額で取引されていたことから、国産で生産できないかと八代将軍徳川吉宗が種を分けて広めたことから「オタネニンジン」と呼ばれていました。吉宗は、対馬藩から生根三本を献上させますが、根付かなかったので、享保十年（一七二五）長崎奉行に命じて、種百余を入手、江戸の小石川薬園・養生所で栽培します。享保十三年（一七二八）には、対馬藩が献上した種子六〇余が各地で栽培され、その中で気候風土が似ていた日光今市のものが成功し、以後栽培所が設置されて全国に広まりました。産地は、長野、島根、会津です。

図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索。